

世界的なパンデミックの影響で、家でのゲーム時間が増え、電子機器への依存が増えたという声が聞かれます。しかし、こちらの医療センターの受診希望者はあまり増えませんでした。オンラインの学習に伴って、動画を見過ぎて困るといふ学校現場からの話があれば、医療関係者の協力も

樋口 進 久里浜医療センター名誉院長

ゲーム依存、焦らず自主性育もう



ひぐち・すすむ 東北大学医学部卒。慶應義塾大学医学部助手、(独)国立病院機構久里浜医療センター院長などを務め、現在は同センター名誉院長。専門は、アルコール・ギャンブル依存症、ゲーム障害。

ては消費者庁も相談を受け付けています。

必要だと思えます。GIGAスクール構想を進めるのであれば、政府には、負の部分に関して対策が求められます。家庭内の問題では済まされない部分があります。

家庭でスマートフォンを使い過ぎを制限するとき、取り上げるといふ手段が取られますが、使用がエスカレートするだけで効果的とはいえません。自分のスマートフォンが使えないとなれば、学校用タブレットを使うまでのことです。

電子機器への依存が激しい子どもへの対応は、学校より家庭の役割が重要でしょう。都道府県の窓口にご相談するのが良いと思います。ゲームへの課金に関して

発達障害の中でも注意欠

如多動性障害と自閉症スペクトラム障害に、ゲーム依存との相関があるように感じます。注意欠如多動性障害の傾向を持つ患者さんは、ご両親も少し気付けていて、本人の努力不足だと主張することがあります。本人の持つ特性を理解した上で、約束事を決め、守れたらその都度で褒めていく方法の他に、治療薬で随分と良くなる場合があります。自閉症スペクトラム障害の傾向を持つ患者さんは、周囲とのコミュニケーションが苦手な不登校になることが多いです。約束は律儀に守ろうとしますが、自己

評価が低いということがあります。そこで、自己評価を上げるように、周囲の理解とサポートが必要です。ゲーム依存とギャンブル依存には似た部分があります。パチンコは18歳からと決まっていますが、ゲームは基本的には年齢制限はないものと同じです。そこで、スマートフォンなど開始年齢を定めるガイドラインが必要ではないかと考えます。

ゲームへの依存は成長に伴い軽減することが多くあります。小・中学校には通わずとも、その後、進学する方は珍しくありません。同時に、不登校の期間が長引くと、学力面で進学後、苦労することが多いようです。その意味では、早期の対応が重要です。